

# 初公開 勝林寺釈迦如来坐像

## —関東最古級の木彫像—



臨濟宗妙心寺派の<sup>まんねんさんしょうりんじ</sup>萬年山勝林寺は、元和元年(1615)に湯島聖堂の近くに創建され、明暦の大火(1657)後には<sup>ほうらいちょう</sup>駒込蓬萊町、昭和十五年には現所在の豊島区の染井霊園近くに移転した。江戸時代には大名や有力旗本達が檀家で、特に老中の<sup>たぬまおきつぐ</sup>田沼意次は中興開基とされ、その墓所があることで知られる。

その勝林寺の本尊釈迦如来坐像は、平安時代前期(九世紀前半)に遡る関東最古級の木彫像である。重厚な表情をみせる大きな頭部、力強い厚みのある体軀、膝前などの<sup>ほんばしき</sup>翻波式の深い衣文は、平安時代初期彫刻としての特徴と魅力を存分にうかがえる。これは平安時代初期彫刻の名品として著名な国宝元興寺薬師如来立像を縮小し、坐像に改変したような姿ともいえる。おおよそ製作環境も元興寺像と近く、本来は畿内に存在した奈良時代以来の官営工房の系譜と伝統を引き継ぐ工房で製作され、近世以前に勝林寺にもたらされて本尊とされたものとみられる。

東京の寺院には、上野寛永寺の本尊を始めとして、平安仏が安置されている場合がある。これは古像を移入してその由緒を引き継ぐことが求められたことや、江戸は度々の厄災にあっているので、その度ごとに本山などの所縁の寺院を通して古像が移入された結果ともいえよう。いずれにせよ勝林寺本尊釈迦如来坐像は、関東最古級の木彫仏であり、その伝来したこと自体が、勝林寺の歴史を物語る重要なものといえる。

展示：平成30年7月20日～9月17日 於神奈川県立金沢文庫展示室

担当・文責：神奈川県立金沢文庫主任学芸員 瀬谷貴之



顔右側面



全身左側面



全身背面



像底